甲府市文化財調査報告 54

武田城下町遺跡Ⅶ

― 日本銀行武田寮建設工事に伴う発掘調査報告書 ―

2011.2

日　本　銀　行
甲府市教育委員会

序

この報告書は、日本銀行武田寮建設工事に先立って実施された武田城下町遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

躑躅ヶ崎の地に武田信虎により館が構えられたことにより本市の歴史が始まることになりますが、武田氏により整備された城下町は館から3.5㎞離れたこの地域まで範囲が及んでいたとされています。またこの場所は、甲府城三の堀に35mとほど近く、徳川家康が滞在したと伝えられる尊躰寺の古地の一角に位置します。

今回の発掘調査により、中世から近世に至るまでの遺物が確認されたことは、両時期にわたる土地利用を解明するための手がかりを得ることができ、貴重な資料が確認されたことと考えています。本報告書が多くの方々の研究資料としてご利用していただければ幸いです。

末筆ではありますが、一連の発掘調査及び報告書の作成にあたり一方ならぬご協力いただいた日本銀行様をはじめといたします関係者、関係機関ならびに調査・整理作業に従事されました方々に厚く御礼申し上げますとともに、本市文化財保護行政の更なる推進に引き続き御助力いただきますようお願い申し上げます。

平成23年2月

甲府市教育委員会

教育長　長谷川　義高

例　　言

1．本書は甲府市武田三丁目239番及び257番の一部に所在する武田城下町遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、日本銀行による武田寮建設工事に伴うものであり、日本銀行との委託契約に基づき甲府市教育委員会が実施した。

3．調査経費は、試掘調査を甲府市教育委員会が、本調査を日本銀行がそれぞれ負担した。

4．試掘調査及び本発掘調査は伊藤正幸（甲府市教育委員会文化財主事）が担当した。

5．発掘調査の期間及び面積は次のとおりである。

試掘調査　平成21年5月27日～平成21年6月5日　調査面積　34㎡

本 調 査　平成22年5月26日～平成22年7月3日　調査面積　270.00㎡

6．本書の執筆は伊藤正幸が行い、図化作業は内藤真千子・上島光子・栗田かず子が行った。

7．本書の編集は戸沢慎一（文化振興課長）を責任者として伊藤正幸が行った。

8．本書に係る出土遺物及び記録図面・写真等は甲府市教育委員会で保管している。

9．発掘調査参加者（敬称略　五十音順）

池谷富士子　影山三亀次　金井いく代　坂本しのぶ　佐田かね子　古屋袈裟男
山 本　誠　渡辺百合子

凡　　例

1．本書に掲載した地図は国土地理院発行1：200,000地形図及び甲府市発行都市計画図1：2,500を用いた。

2．方位の表記はすべて磁北を示す。

3．土層図等に表記されている水平線の数字は海抜標高を表し単位は「m」である。

目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次

第1章　遺跡を取り巻く環境 …… 1
第1節　遺跡の地理的環境
第2節　遺跡の歴史的環境

第2章　調　査　概　要 …… 5
第1節　調査に至る経緯
第2節　調 査 経 過
第3節　試 掘 調 査
第4節　調査の方法
第5節　基 本 層 序

第3章　遺 構 と 遺 物 …… 8
建　物　跡
溝 状 遺 構
土　　坑
石 組 遺 構

挿図目次

図 1　遺跡を取り巻く地形 …… 2
図 2　城下町の範囲と調査位置 …… 3
図 3　江戸期における調査地周辺の様相 …… 4
図 4　試掘調査トレンチ配置図 …… 6
図 5　調査区グリッド配置図 …… 7
図 6　調査区セクション図 …… 9
図 7　調査区全体図 …… 10
図 8　建　物　跡 …… 11
図 9　溝　　跡 …… 12
図10　土　　坑 …… 13
図11　石 組 遺 構 …… 14
図12　出土遺物（1） …… 18
図13　出土遺物（2） …… 19
図14　出土遺物（3） …… 20
図15　出土遺物（4） …… 21

写真目次

図版 1　遺構写真 1
図版 2　遺構写真 2
図版 3　遺物写真 1
図版 4　遺物写真 2
図版 5　遺物写真 3
図版 6　遺物写真 4

挿表目次

表 1　遺物観察表 1 …… 16
表 2　遺物観察表 2 …… 17

第１章　遺跡を取り巻く環境

第１節　遺跡の地理的環境

太良峠（1,120m）に源を発する相川は、下積翠寺町を扇央部とする扇状地を甲府市街地北側に展開する。この扇状地上は永正16年（1519）武田信虎により居館が構えられ、現在の甲府市の礎が築かれた場所である。

甲府市北部の水ケ森林道は、関東山地の主峰をなす奥秩父連山から派生する小尾根上を南下する。これが荒川水系と笛吹川水系とを分かつ尾根である。この小尾根は帯那山を越えると西・中・東の３本に分かれるが、中央の枝尾根が金子峠を通過して湯村山を形成する。一方東進した尾根は緩やかに湾曲してさらに枝分れし、愛宕山、躑躅が崎及び甲府盆地東部の里山を形成する。相川扇状地の三方にこれらの枝尾根が作り出した地形が、甲陽軍艦に記される『左右鶴翼の如く』の地形であることはいうまでもない。太良峠から武田氏館跡まで直線距離で4.6㎞ほどだが、標高差は800mを測る。それに対して館跡以南の標高差は60m程度である。

相川扇状地の扇央部は下積翠寺町の中央部に見出すことが可能である。扇端部は湯村山から朝日二丁目をとおり愛宕山に至る円弧にあてるのが適当で、それ以南では荒川との複合扇状地と捉えるのがよかろう。相川扇状地の拡がりを見たとき、標高400mの等高線を基準にすると太良峠と武田氏館跡中曲輪を結ぶ直線に直行する距離で、武田氏館跡北の位置で1.6㎞、山梨大学附属養護学校付近で2.7㎞、さらに国立甲府病院付近では2.9㎞を測るまでに拡がりを見せる。武田氏館跡を含めた武田城下町遺跡の範囲として現状周知されている地域は、相川以東の扇状地上で、扇央部からの直線距離が概ね2,580mの円弧に重ねることができる。

今回調査した地点は武田城下町遺跡の南端部分に位置し、標高292.5mを測る。周辺も含めて開発が進行している住宅地である。

第２節　遺跡の歴史的環境

永正16（1519）年、躑躅ヶ崎館の完成に伴い、武田信虎が石和から移り住む。躑躅ヶ崎の建設が単に居住空間あるいは防御上の好適地としてなされたものではなく、領国経営の本拠地として、家臣団の集住や商工業者の誘致をも図り、結果的には経済的・文化的にも領国の中核をなす城下町の建設を目指したものであった。

そして在地領主層を掌握するとともに、権力の集中をはかろうとして有力国人層の移住を強行した。この方策には栗原・逸見（今井）・大井ら有力者の反乱を招くがこれを平定した。また大永元年（1521）には駿河の今川氏が甲斐に攻め入ってくるが信虎は飯田河原及び上条河原で迎え撃って大勝した。以後領内の統治に意を注ぐとともに、城下町の整備を進めることになる。

城下町は相川扇状地上の南北５㎞、東西2.5㎞におよぶ広大なものである。南北５本の街路で区画された屋敷地区には特定の職能集団の名を付した小路（鍛冶小路等）や武士の職種を意味する小路（近習小路等）が存在し、同種の職人及び武士等の集住がある程度進んでいたことが理解できる。そしてそれと同時に、武士の居住地域と承認の居住地域とは明確な分離が行われていなかったとされる。

『甲府市遺跡地図』では、武田城下町遺跡の南端部分を、甲府城三の堀までとしている。しかし近年、北口周辺の再開発事業に伴う発掘調査では、現行住所表記による北口一丁目・

図１　遺跡を取り巻く地形

武田氏館跡
武田城下町遺跡
甲府城下町遺跡
竜華池
古府中町
西田町
屋形三丁目
屋形一丁目
屋形二丁目
大手一丁目
大手二丁目
北新一丁目
北新二丁目
天神町
武田四丁目
武田三丁目
武田二丁目
美咲二丁目
朝日五丁目
朝日四丁目
朝日二丁目
朝日一丁目
北口一丁目
北口二丁目
北口三丁目
宮前町
元紺屋町
変宮山
国立山梨大学
山梨大学附属小学校
山梨大学附属中学校
山梨大学附属幼稚園
山梨大学附属養護学校
山梨大学附属発酵化学研究施設
山梨県歯科衛生専門学校
山梨県医師会
北東中学校
山梨大学美術家
テニスコート
東京電力武田変電所
山梨大学附属無機合成研究施設
燃料電池実験施設
甲府市営林署
甲府市田子寮
八幡神社
八幡橋
不動橋
大泉寺
大泉橋
市営斎場
妙法寺
自由広場
解放戦士の碑
展望広場
甲府第一高校
甲府市営北新住宅
甲府市営むつみ住宅
甲府市営相川住宅
相川小学校
相川市民会館
相川橋
向田橋
大橋
神橋
つつじが崎橋
甲府市役所
甲府市民会館
甲府市立図書館
甲府市立美術館
甲府市立病院
甲府市立看護学校
甲府市立看護学校附属病院

古府之図

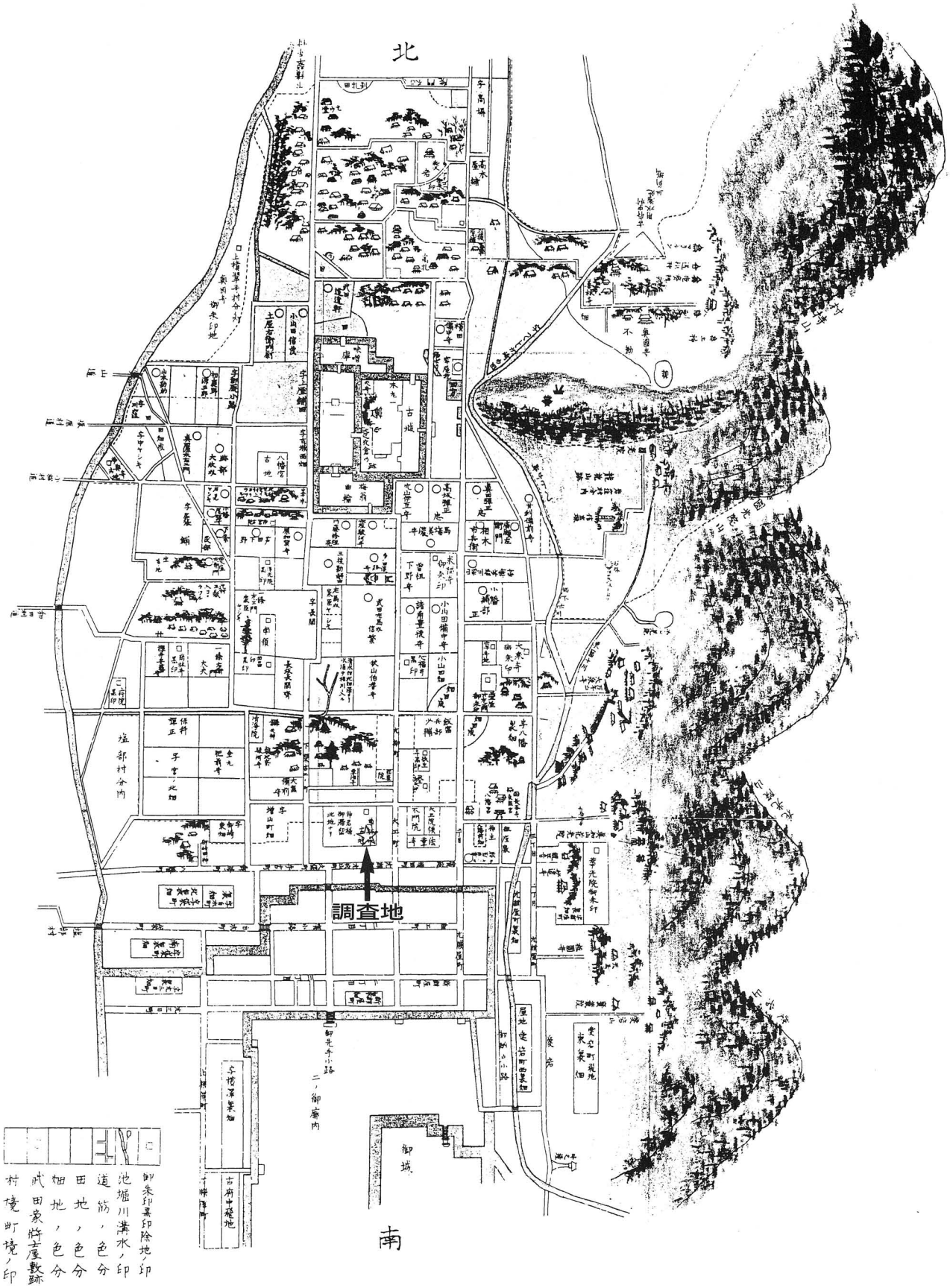


図３　江戸期における調査地周辺の様相（甲府略志）

二丁目・三丁目一帯から中世の遺物が検出されていることから、甲府城内にまで城下町が拡がっていたことが指摘されている。

今回の調査地は旧尊躰寺の寺域の一部にあたる。旧尊躰寺は大永年間に武田信虎により建立された寺院とされ、永禄年間に近世城下町を整備するにあたり現在の城東へ移転させられた寺院である。現地に残る『尊躰寺旧跡碑』によれば天正10年と11年には、徳川家康が御在陣になった寺である旨が記されている。

第2章　調　査　概　要

第1節　調査に至る経緯

武田城下町遺跡の範囲内において、日本銀行から社員寮建設工事に伴ない、平成21年5月11日付けで文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘届けが提出された。届出を受けて甲府市教育委員会と日本銀行との間で協議を行い、教育委員会が平成21年5月27日から平成21年6月5日までの期間に遺跡の有無や時代・範囲・内容等を確認するため、試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、城下町遺跡に関連する可能性のある遺構・遺物が確認されたため、日本銀行と協議を行い、発掘調査及びその後の整理作業を含めた報告書刊行までの経費を日本銀行側の負担とすること及び、発掘調査は建物建設予定範囲で行うことで合意し、平成22年5月24日付けで業務委託契約を締結した。発掘調査は平成22年5月26日に着手し、平成22年7月5日に終了した。

第2節　調 査 経 過

2009年5月27日　試掘調査着手
　　6月 5 日　試掘調査終了
2010年5月24日　文化財保護法第99条に基づく報告提出
　　5月31日～6月3日　重機により荒掘
　　6月 3 日～7月2日　遺構の検出及び記録
　　7月 5 日　埋蔵物発見届及び埋蔵文化財保管証提出

第3節　試 掘 調 査

試掘調査は、平成21年5月27日から6月5日まで行った。計画建物と現状の建物との重複部分が多かったため限定的な調査に限られた。

1号試掘溝　幅2m、長さ5.5mで南北に掘り下げた。客土の厚さは70乃至75㎝を測る。客土を除去すると小礫及び白色砂を含む黒色粘土層及び茶褐色土層が確認され、その下層が中世の遺物包含層になる。表土から遺物包含層まで1mを測る。遺物包含層は黒色土層及び茶褐色土層で、検出された遺物は小破片であるが、黒色土層中には炭化物ブロックの混入も確認できたことから当時の生活面である可能性が強い。

2号試掘溝　幅2m、長さ11.5mで東西に掘り下げた。客土の厚さは70㎝前後を測る。客土を除去すると黒色土層及び茶褐色土層に至るが、この層から中世の遺物及び炭化物ブロック等が確認された。遺物は西壁付近からの出土が顕著で、中央部及び東部からは親

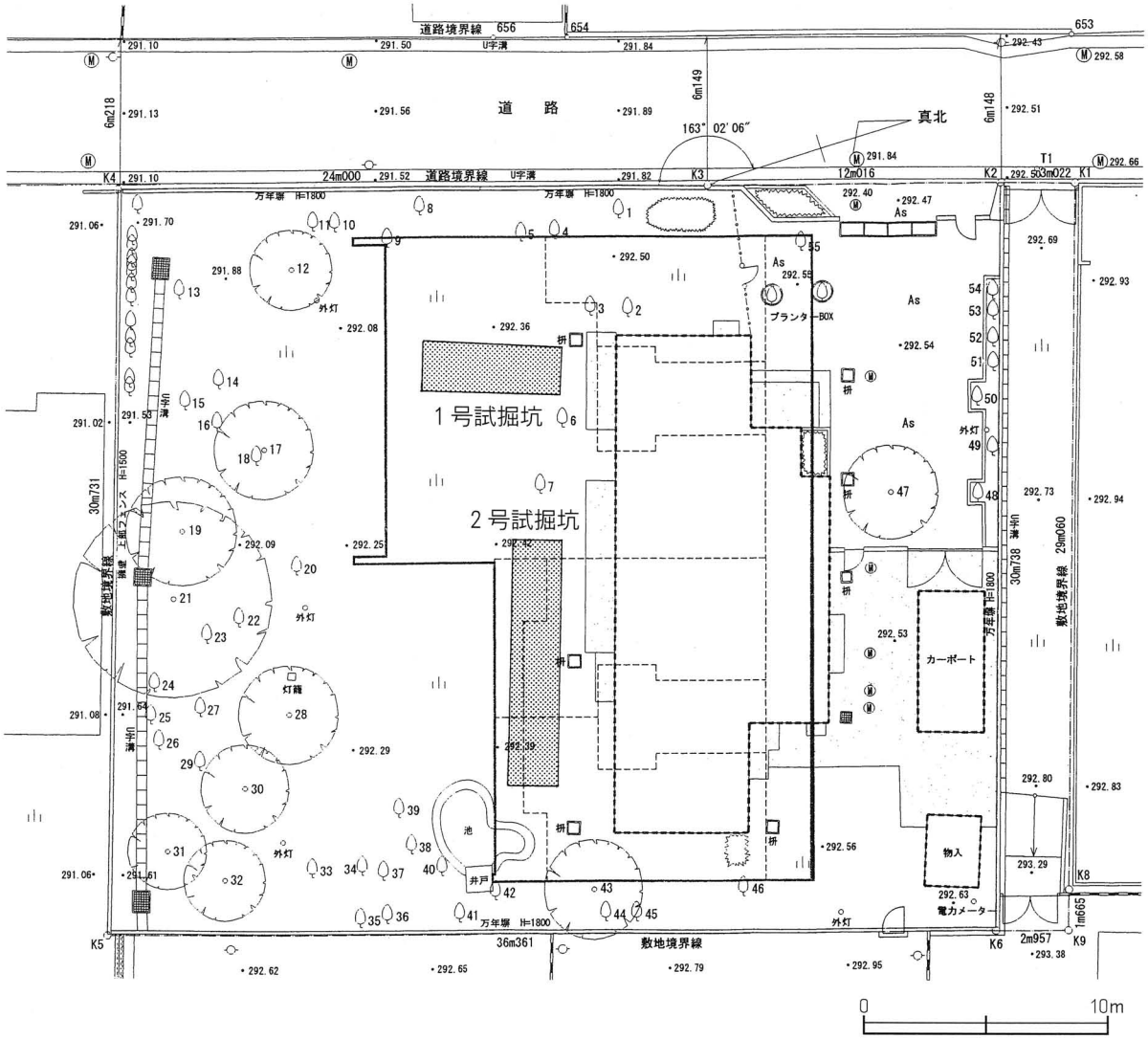


図４　試掘調査トレンチ配置図

指大前後の小破片が検出された。

さらに現建物の解体に際して、平成 22 年 5 月 18 日には立会調査を実施し、現建物の基礎によりその下部は攪乱されていること及び埋蔵文化財は存在しないことを確認し、本調査範囲を確定させた。

第４節　調査の方法

試掘調査及び立会調査の結果から本調査を実施すべき範囲については、現状の建物と重複する部分を除いた計画建物の範囲とし、約 270 ㎡を調査対象とした。

試掘調査により確認された遺構面までの土砂は重機により剥ぎ取った。

調査に際して、調査地の形状に合わせて４ｍ×４ｍのグリッドを設定し、南東隅から南北方向へアルファベット列で、東西方向に数列で表記し、組み合わせてグリッド番号とするとともに、南東隅の杭により調査区を表現した。

調査区の設定後、人力により遺構確認作業を行った。確認された遺構は土層観測用の畦を残して掘り下げたが、規模の小さな柱穴等は半裁して掘り下げた。また撹乱部分については、調査に影響が及ばない範囲まで事前に土砂等を取り除き、また試掘調査によるトレンチ内の埋め土は先に除去した。

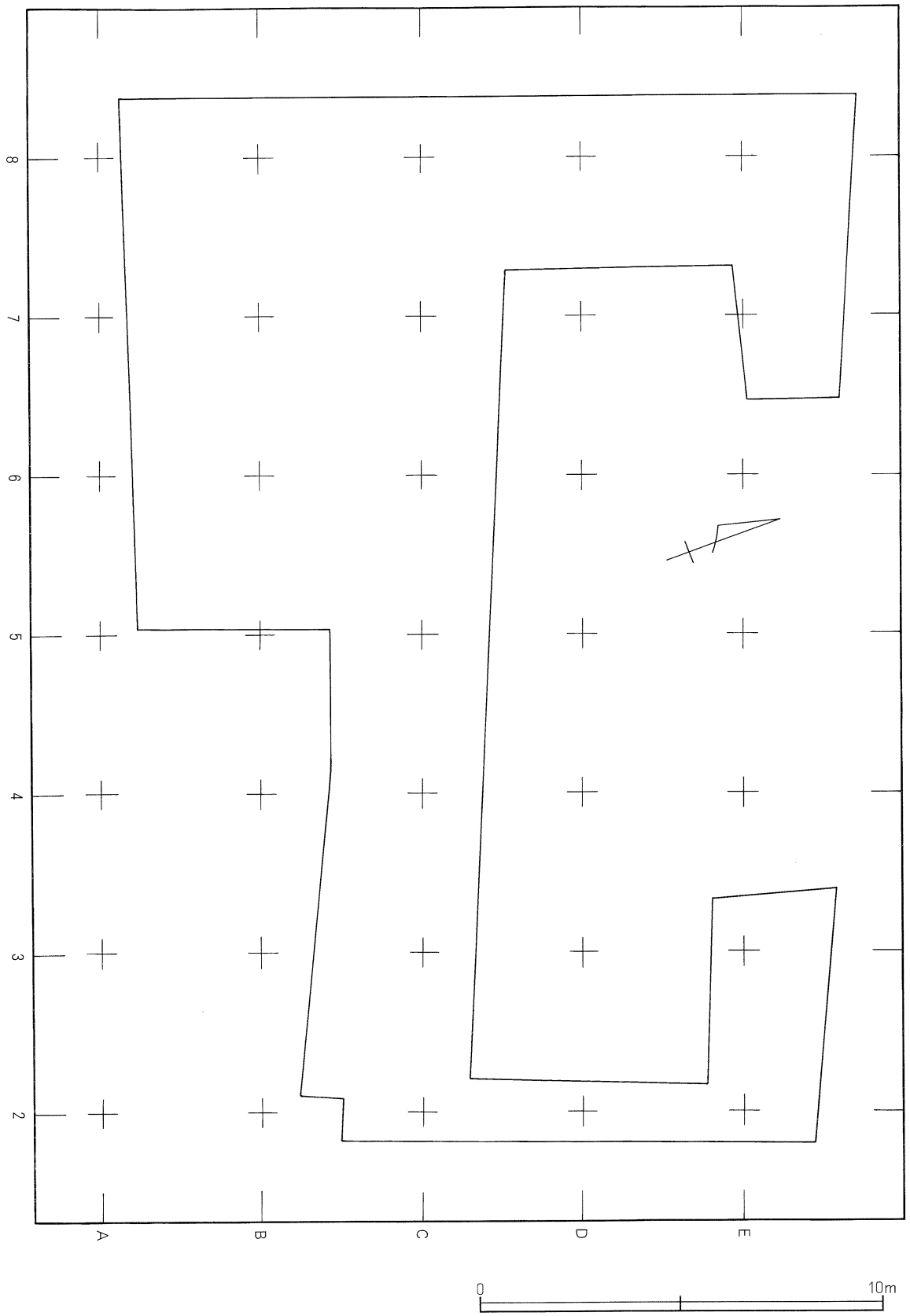


図５　調査区グリッド配置図

第5節　層　　序

調査地の東壁（A5、B5）及び南壁（A5）で特徴的な層序が確認できた。この部分では土質及び土色により

Ⅰ層：明茶褐色土層
Ⅱ層：灰白色及び黄褐色の混合粘土層
Ⅲ層：茶褐色土層
Ⅳ層：茶褐色土層　Ⅴ層：褐色粗粒砂層
Ⅵ層：褐色土層
Ⅶ層：明茶褐色土層
Ⅷ層：褐色土層
Ⅸ層：褐色土及び暗赤褐色土の混合土層

の9層及び1号溝跡の覆土である黒色粘土層に別けられる。このうちⅢ層は中世の遺物包含層であり、Ⅱ層は近世の造成面である可能性が強い。南壁西端でⅡ層は途切れるが、この部分には五輪塔の地輪部分が確認されている。

第3章　遺構と遺物

今回の調査により、掘立柱建物跡1棟、溝跡2条、土坑2基、石組み遺構1基及び小竪穴（ピット）が確認された。

建　物　跡

位置　B3グリッド
柱穴　ピット1・2・3・8・5
主軸方向　N－118°－E
検出状況　平面形が円形の柱穴で、直径15㎝前後、深さは10～15㎝を測る。90㎝間隔で1間×2間の検出状況である。ピット7が補助的な柱穴になる可能性も否定できない。また南壁中は6基目の柱穴も確認されている。
遺物　建物跡周辺からカワラケ、小型壺等が検出した。14図80番のカワラケは、溶融物とともに、金の付着が確認された。

溝状遺構

1号溝跡

位置　ＡＢＣ-5
主軸方向　N－40°－E
検出状況　南北方向の溝跡で、南端は調査区外へ延び、北端は、建物により破壊されている。客土層を含む現表土から140㎝の位置に検出された。幅40㎝～70㎝の細い溝跡で、深さは10㎝乃至20㎝である。北から南へ流れたものと思われる。細粒砂の堆積は認められず、敷地境界を示す開渠と思われる。
遺物　遺物は検出されなかった。

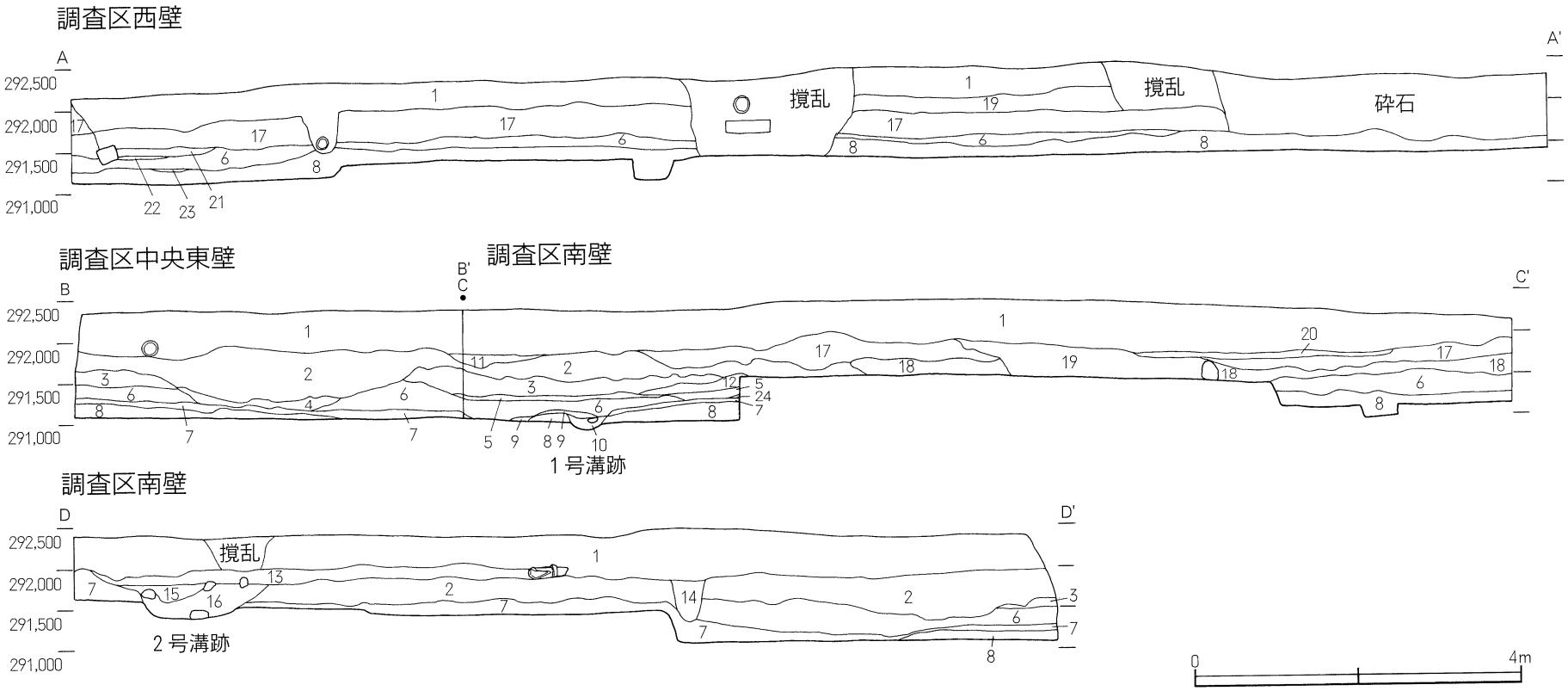
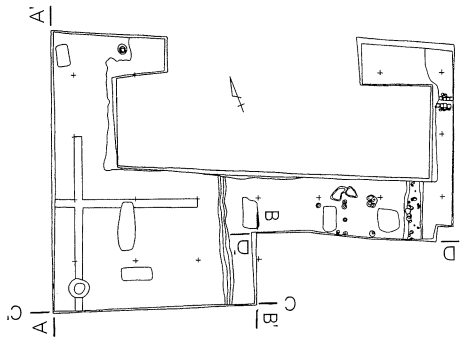


図6 調査区セクション図

1. 明茶褐色土層（造成に伴う客土）
2. 灰白色及び黄褐色の混合粘土層（近世の造成面か）
3. 茶褐色土層　赤色及び白色土粒子を多く含む。（中世末の遺物包含層）
4. 茶褐色土層　赤色及び白色土粒子を若干含む。
5. 褐色粗粒砂層
6. 褐色土層　赤色及び白色土粒子を若干含む。
7. 明茶褐色土層　粘性強い。
8. 褐色土層　粘性やや強く、しまり強い。
9. 褐色土及び明赤褐色土の混合土層
10. 黒色粘土層
11. 黄褐色土層
12. 茶褐色土層　赤色及び白色土粒子を若干含む。（4層と同じ）
13. 撹乱（暗渠埋設に伴う）
14. 明茶褐色土層　灰白色及び黄褐色粘土ブロックを含む。
15. 明茶褐色土層　赤色土粒子を含む。（2号溝跡）
16. 明茶褐色土層　赤色土粒子及び人頭大の礫・かわらけが混入する。（2号溝跡）
17. 明茶褐色土層　白色及び赤色土粒子を多く含む。
18. 茶褐色土層　黄褐色粘土及び灰白色粘土ブロックを多く含む。
19. 茶褐色土層　黄褐色粘土及び灰白色粘土ブロックを若干含む。
20. 褐色粗粒砂層
21. 褐色土層　6層よりやや暗い。
22. 茶褐色土及び黄褐色土の混合土層
23. 褐色土層　白色土粒子を若干含む。
24. 明茶褐色土層　赤色及び白色土粒子を若干含む。



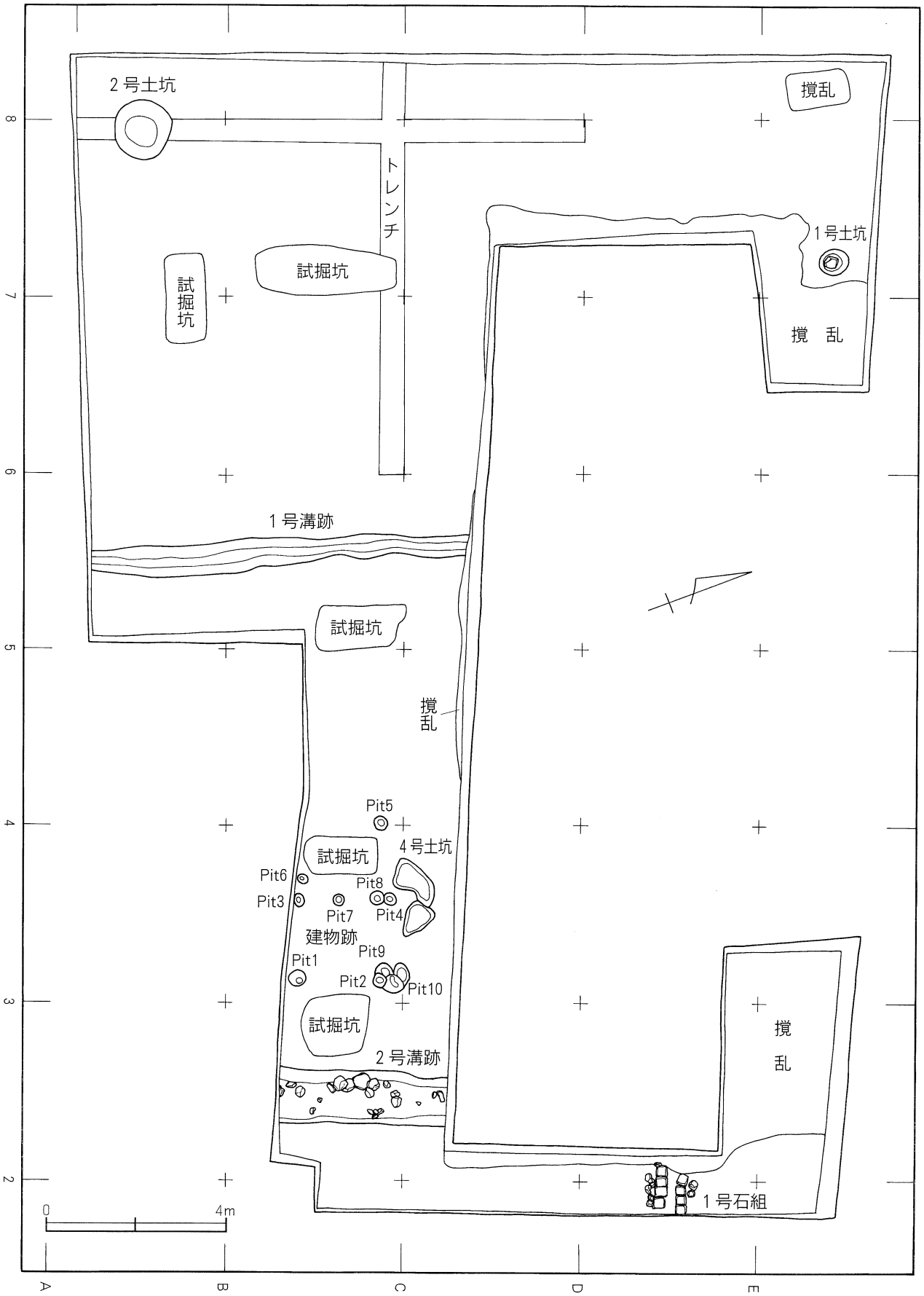

2号土坑
撹乱
トレンチ
1号土坑
試掘坑
試掘坑
撹　乱
1号溝跡
試掘坑
撹乱
Pit5
4号土坑
試掘坑
Pit6
Pit8
Pit3
Pit7
Pit4
建物跡
Pit9
Pit1
Pit2
Pit10
試掘坑
撹乱
2号溝跡
1号石組
0
4m
8
7
6
5
4
3
2
A
B
C
D
E

図7　調査区全体図

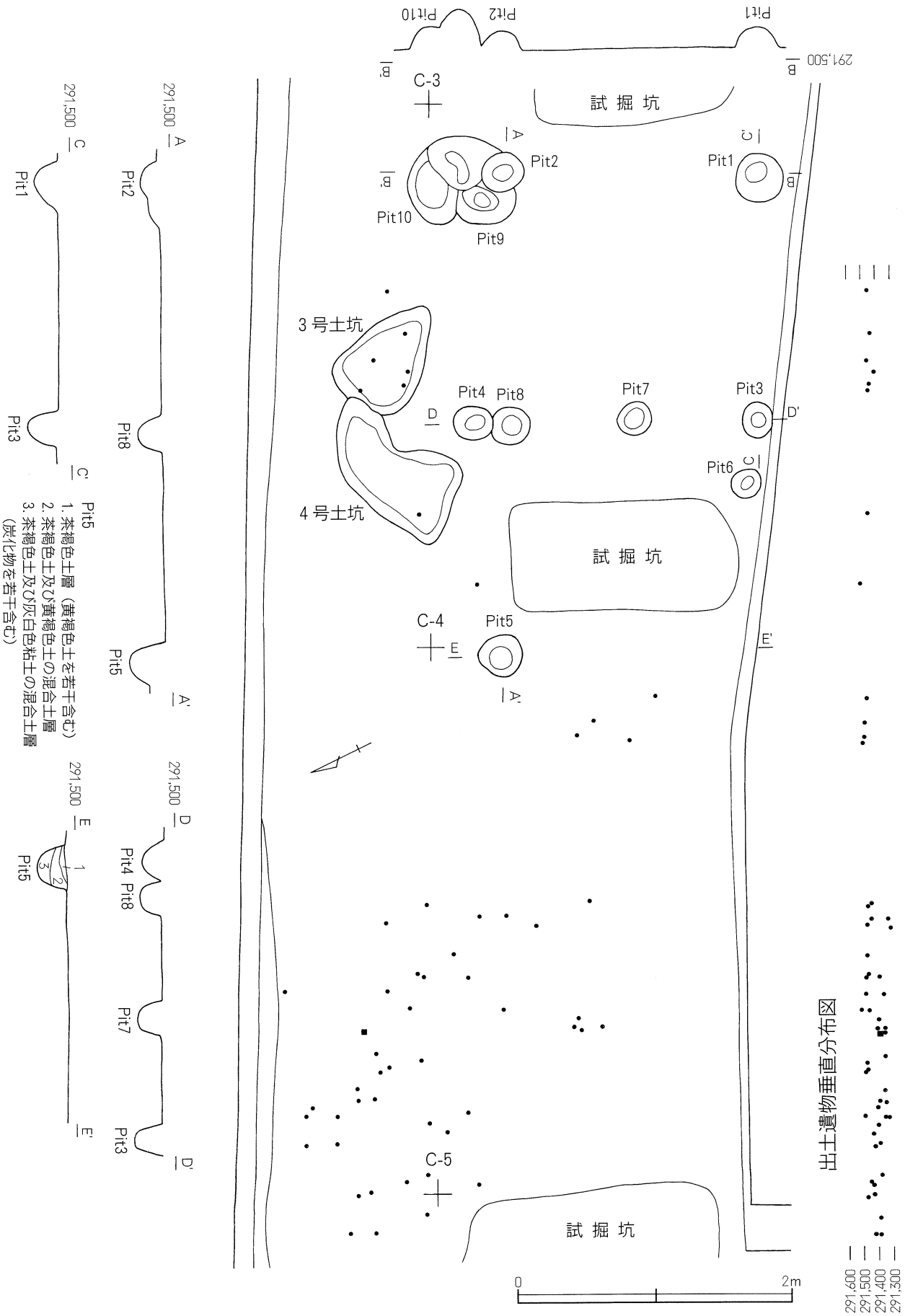

試掘坑
C-3
Pit1
Pit2
Pit9
Pit10
3号土坑
4号土坑
Pit3
Pit4
Pit5
Pit6
Pit7
Pit8
C-4
C-5
291,500
291,400
291,300
0
2m
出土遺物垂直分布図
Pit5
1. 茶褐色土層（黄褐色土を若干含む）
2. 茶褐色土及び黄褐色土の混合土層
3. 茶褐色土及び灰白色粘土の混合土層
（炭化物を若干含む）

図8 建 物 跡

1号溝跡

2号溝跡

C-6

C-2

A

A'

B

B'

291,200 A A'

1. 褐色土層　粘性強く、しまり弱い。
2. 暗黄褐色土層

291,900 A A'

1. 茶褐色土層　炭化物若干含む。
2. 暗黄褐色土層　粘性・しまり強い。

B-6

291,200 B B'

1. 褐色土層　赤色及び白色土粒子を若干含む。
2. 褐色土及び暗赤褐色土の混合土層。
3. 黒色粘土層
4. 明茶褐色土層　粘性強い。
5. 褐色土層　粘性やや強く、しまり強い。

291,900 B B'

1. 撹乱（暗渠埋設に伴う）
2. 明茶褐色土層　赤色土粒子を含む。
3. 明茶褐色土層　赤色土粒子及び人頭大の礫・かわらけが混入する。
4. 灰白色及び黄褐色の混合粘土層（近世の造成面か）
5. 明茶褐色土層　粘性強い。

0　2m

図9　溝　　跡

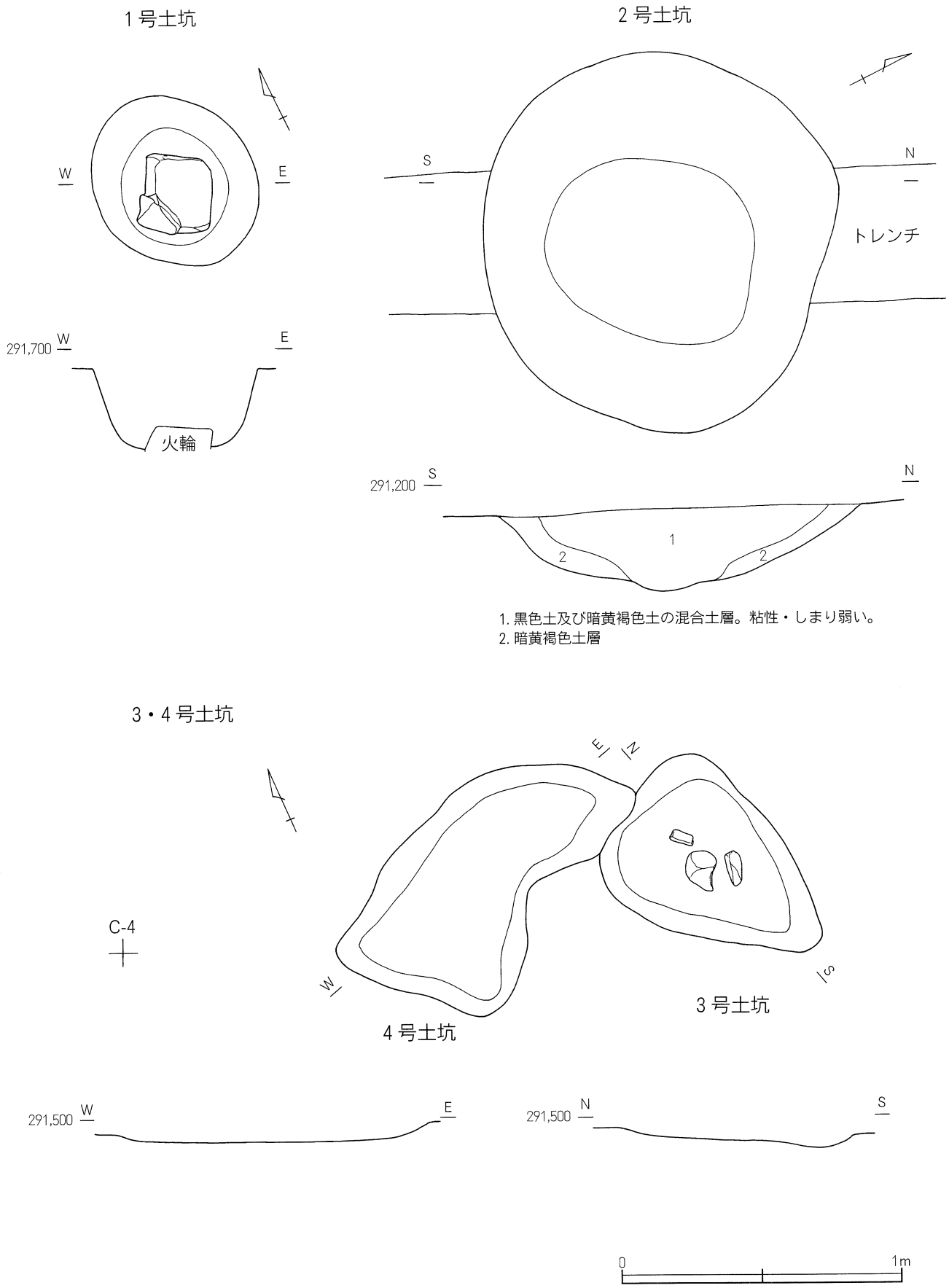

1号土坑
W
E
291,700 W
E
火輪
2号土坑
S
N
トレンチ
291,200 S
N
1
2
2
1. 黒色土及び暗黄褐色土の混合土層。粘性・しまり弱い。
2. 暗黄褐色土層
3・4号土坑
E
N
C-4
W
S
4号土坑
3号土坑
291,500 W
E
291,500 N
S
0
1m

図10　土　　坑

2号溝跡

位置　B-2～C-2

主軸方向N－40°－E

検出状況　南北方向の溝跡で、南端は調査区外へ延び、北端は建物により破壊されている。客土層を含む現地表面から50㎝の位置から検出された。

幅120㎝～130㎝で、深さは25㎝乃至40㎝を測る。内部は拳大の礫が充填されており遺物も検出されたことから、人為的に廃棄されたものと思われる。流路は北から南である。

遺物　カワラケ及び釘が出土した。

土　　坑

土坑は4基が確認された。

1号土坑

位置　E-7

検出状況　径60㎝のほぼ円形で、深さは32㎝を測る。底部に五輪塔の火輪を逆位に据え付けていた。掘立柱建物の一部で、墓石を礎石に転用した可能性が高い。

遺物　五輪塔（火輪）

2号土坑

位置　A-8

検出状況　径130㎝のほぼ円形の土坑で、深さ30㎝を測る。

遺物　遺物は出土しなかった。

3号土坑

位置　C－3

検出状況　長軸80㎝の不整三角形で5㎝ほど掘りこむ。覆土には炭化物及び焼土を伴う。

遺物　カワラケ4点が出土した。

4号土坑

位置　C－3

出土状況　長軸120㎝の不整形で、3号土坑を切るように接する。掘り込みは5㎝ほどと浅い。覆土には炭化物及び焼土を伴う。

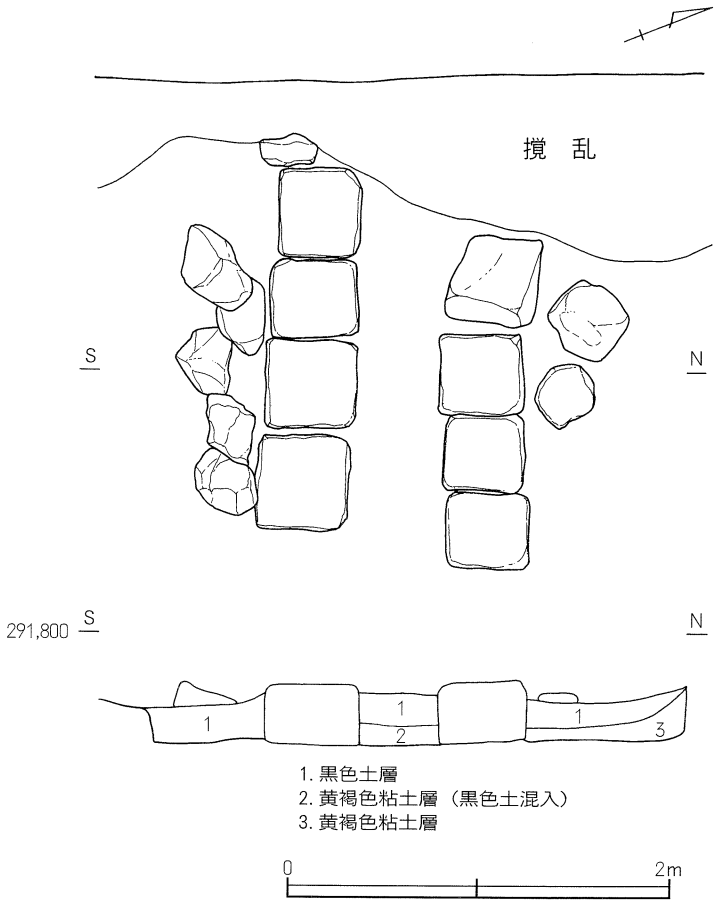


図11　石組遺構

石 組 遺 構

位置　D－2

検出状況　五輪塔の地輪を転用して4個づつ2列に構築されている。検出部分で北側では1.6m、南側では1.8mをはかる。双方とも西側は旧社宅の基礎によりはかされていた。東側へ続く形跡はなかった。

地輪の外側には自然石が存在するが、地輪との関係は確認されなかった。また内部に遺物はなく、掘り込みも確認されなかった。暗渠あるいは開渠等の水路かとも思われるが、内部には砂層などによる流れた形跡は確認できず、雨落ち溝として使用されていた遺構の一部であるかとおもわれる。

遺物観察表

図版番号	遺物番号	出土位置	遺構番号	種別	器種	法量			色調	焼成	備考
						口径	器高	底径			
12	1	B-2	SD-2	土器	カワラケ	13.4	2.7	6.7	5YR6/6 橙		
12	2	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(11.2)	2.5	(6.0)	7.5YR7/4 にぶい橙		
12	3	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(14.4)	3.4	7.8	7.5YR6/6 橙		
12	4	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(12.0)	2.2	(5.4)	7.5YR7/4 にぶい橙		内部スス付着
12	5	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(10.6)	(2.7)	(5.4)	7.5YR7/4 にぶい橙		
12	6	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(12.8)	(2.7)	(7.8)	7.5YR7/4 にぶい橙		
12	7	B-2	SD-2	土器	カワラケ	12.0	2.0	(6.2)	7.5YR7/4 にぶい橙		
12	8	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(14.0)	2.7	(7.8)	5YR6/6 橙		
12	9	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(13.0)	2.6	(6.0)	7.5YR7/4 にぶい橙		
12	10	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(12.4)	2.8	(6.2)	7.5YR7/4 にぶい橙		
12	11	B-2	SD-2	土器	カワラケ	16.6	3.5	9.0	7.5YR6/4 にぶい橙		
12	12	B-2	SD-2	土器	カワラケ	13.1	2.6	7.4	7.5YR6/4 にぶい橙		
12	13	B-2	SD-2	土器	カワラケ	10.8	2.4	5.8	7.5YR7/3 にぶい橙		
12	14	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(15.4)	(3.0)	(7.6)	5YR6/6 橙		
12	15	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(13.4)	3.1	7.2	7.5YR7/3 にぶい橙		
12	16	B-2	SD-2	土器	カワラケ	11.4	2.4	5.8	7.5YR6/4 にぶい橙		
12	17	B-2	SD-2	土器	カワラケ	—	—	(10.0)	5YR6/6 橙		
12	18	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(8.0)	1.7	(4.4)	7.5YR6/4 にぶい橙		
12	19	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(9.2)	2.3	(4.0)	7.5YR7/4 にぶい橙		
12	20	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(7.0)	1.7	(3.8)	7.5YR7/4 にぶい橙		
12	21	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(8.0)	(1.7)	(4.0)	5YR/6 橙		
12	22	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(8.0)	1.5	(4.2)	7.5YR7/4 にぶい橙		
12	23	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(10.0)	2.3	(4.2)	7.5YR7/3 にぶい橙		
12	24	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(9.4)	(1.5)	(5.8)	7.5YR6/6 橙		
12	25	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(8.4)	(1.6)	(5.0)	5YR7/4 にぶい橙		
12	26	B-2	SD-2	土器	カワラケ	—	—	—	5YR5/1 褐灰		金付着
12	27	B-2	SD-2	土器	カワラケ	(8.4)	(2.3)	(4.0)	7.5YR7/6 橙		
12	28	B-2	SD-2	金属	釘	厚さ 1.5	長さ (5.0)				
12	29	E-7	SK-1	石製品	火輪	幅 23.7	高さ 9.5				削り跡が顕著
12	30	B-3	SK-3	土器	カワラケ	(17.0)	—	—	—		
12	31	B-3	SK-3	土器	カワラケ	—	—	(6.0)	—		
13	32	B-4	一括	土器	カワラケ	(13.8)	(3.0)	(7.0)	7.5YR7/4 にぶい橙		
13	33	B-4	一括	土器	カワラケ	(13.6)	(2.8)	(7.2)	10YR7/3 にぶい黄橙	焼きむら多い	
13	34	C-5	一括	土器	カワラケ	(14.0)	(3.2)	(7.0)	7.5YR7/4 にぶい黄橙		
13	35	C-4	一括	土器	カワラケ	13.3	3.0	7.2	5YR6/8 橙		
13	36	C-4	一括	土器	カワラケ	(12.9)	(2.8)	(6.6)	7.5YR7/4 にぶい橙		
13	37	B-2	一括	土器	カワラケ	(12.0)	(2.5)	(6.0)	5YR6/6 橙	良	摩耗
13	38	B-2	一括	土器	カワラケ	(12.0)	(2.8)	(5.6)	7.5YR7/6 橙	良	摩耗（底部）
13	39	B-2	一括	土器	カワラケ	11.2	2.9	6.0	7.5YR6/6 橙		
13	40	B-4	一括	土器	カワラケ	—	—	6.4	7.5YR7/3 にぶい橙		
13	41	B-4	一括	土器	カワラケ	—	—	(9.0)	7.5YR7/6 橙		
13	42	C-5	一括	土器	カワラケ	(15.0)	—	—	7.5YR7/4 にぶい橙		
13	43	B-2	一括	土器	カワラケ	—	—	(6.0)	7.5YR7/4 橙		
13	44	B-2	一括	土器	カワラケ	(12.4)	(2.2)	(5.8)	7.5YR6/6 橙		
13	45	C-1	一括	土器	カワラケ	(10.0)	(2.7)	(5.0)	5YR7/3 橙		
13	46	B-2	一括	土器	カワラケ	(10.0)	(2.1)	(5.0)	7.5YR7/4 にぶい橙		
13	47	B-2	一括	土器	カワラケ	(8.0)	(1.6)	(4.6)	5YR6/6 橙	良	
13	48	B-2	一括	土器	カワラケ	(6.8)	(1.3)	(5.0)	7.5YR6/4 にぶい橙	良	
13	49	E-2	一括	土器	カワラケ	(8.0)	(1.8)	(4.0)	7.5YR7/6 橙		
13	50	B-2	一括	土器	カワラケ	(7.8)	(1.4)	(4.2)	5YR6/6 橙		

図版番号	遺物番号	出土位置	遺構番号	種別	器種	法量			色調	焼成	備考
						口径	器高	底径			
13	51	B-2	一括	土器	カワラケ	(7.2)	(2.1)	(4.2)	7.5YR5/6 明褐	良	
13	52	C-1	一括	土器	カワラケ	(8.0)	(1.9)	(4.0)	5YR6/1 橙		
13	53	C-5	一括	土器	カワラケ	(7.0)	(1.9)	(3.0)	7.5YR7/4 にぶい橙		
13	54	A-8	一括	土器	カワラケ	(14.0)	(2.7)	(7.0)	7.5YR6/6 橙	良	
13	55	B-4	一括	土器	カワラケ	(13.2)	(2.8)	(7.0)	10YR7/3 にぶい黄橙		
13	56	C-5	一括	土器	カワラケ	(16.6)	(3.4)	(9.0)	7.5YR7/4 にぶい橙		
13	57	C-4	一括	土器	カワラケ	(12.6)	(3.3)	(6.2)	7.5Y7/4 にぶい橙	底部摩耗	
13	58	C-3	一括	土器	カワラケ	12.2	3.0	7.0	7.5YR7/4 にぶい橙		
13	59	B-3	一括	土器	カワラケ	12.6	3.0	7.0	7.5YR6/6 橙		
13	60	B-2	一括	土器	カワラケ	(11.0)	—	—	7.5YR6/6 橙		スス付着
13	61	C-4	一括	土器	カワラケ	(13.2)	(3.0)	(7.0)	7.5Y7/4 にぶい橙		
13	62	C-4	一括	土器	カワラケ	(13.0)	—	—	7.5YR7/6 橙		
13	63	C-5	一括	土器	カワラケ	(13.0)	—	—	10YR7/3 にぶい黄橙		
13	64	B-2	一括	土器	カワラケ	(14.0)	(2.9)	(8.0)	5YR6/6 橙	良	摩耗
13	65	C-5	一括	土器	カワラケ	13.2	3.2	6.2	7.5YR7/4 にぶい橙		
14	66	C-3	一括	土器	カワラケ	(18.0)	—	—	7.5YR6/6 橙		
14	67	C-2	一括	土器	カワラケ	—	—	—	5YR6/6 橙		
14	68	B-2	一括	土器	カワラケ	—	—	(7.0)	7.5YR7/4 にぶい橙		
14	69	C-2	一括	土器	カワラケ	—	—	(9.0)	7.5YR7/4 にぶい橙		
14	70	C-5	一括	土器	カワラケ	—	—	(8.0)	7.5YR7/6 橙		
14	71	C-2	一括	土器	カワラケ	—	—	(6.0)	7.5YR7/4 にぶい橙		
14	72	C-4	一括	土器	カワラケ	—	—	(6.0)	10YR7/3 にぶい黄橙		
14	73	C-4	一括	土器	カワラケ	8.6	1.8	5.0	7.5YR		
14	74	B-2	一括	土器	カワラケ	(8.4)	(1.8)	(5.0)	5YR6/6 橙	良	
14	75	B-2	一括	土器	カワラケ	(7.4)	(1.3)	(4.8)	5YR7/6 橙		摩耗
14	76	B-2	一括	土器	カワラケ	(7.2)	(1.9)	(4.0)	5YR6/6 橙	良	摩耗
14	77	C-5	一括	土器	カワラケ	(8.0)	(2.0)	(4.6)	7.5YR7/4 にぶい橙		
14	78	B-2	一括	土器	カワラケ	7.6	1.6	4.5	7.5YR7/6 橙	良	摩耗
14	79	C-4	一括	土器	カワラケ	(8.0)	—	—	7.5YR7/4 にぶい黄橙		
14	80	B-2	一括	土器	カワラケ	—	—	—	5Y5/1 灰		金付着
14	81	B-4	一括	土器	釜	(20.0)	—	—	外 2.5Y5/1 黄灰 内 2.5Y7/3 にぶい橙		
14	82	C-5	一括	土器	甕	—	—	—	6YR5/6 明褐色		
14	83	A-8	一括	石製品	地輪	幅 24.5	高さ 21.1				削り跡が顕著
14	84	調査区	一括	土器	カワラケ	15.0	2.5	5.8	5YR7/6 橙		
14	85	調査区	一括	土器	カワラケ	(10.4)	—	—	7.5YR7/4 にぶい橙		
14	86	調査区	一括	土器	カワラケ	(11.0)	(2.1)	(6.2)	10YR7/4 にぶい橙		
14	87	調査区	一括	土器	カワラケ	—	—	(7.0)	10YR7/4 にぶい橙		
14	88	調査区	一括	土器	甕底	—	—	9.0	内 7.5YR7/6 にぶい橙 外 10YR5/4 にぶい黄橙		
14	89	調査区	一括	土器	すり鉢	—	—	(11.0)	7.5YR7/6 橙		
14	90	調査区	一括	陶器	カワラケ	—	—	—	内 7.5YR7/1 灰白 外 7.5Y6/2 灰オリーブ		
15	91	D-1・2	石組遺構	石製品	地輪	幅 19.5	高さ 13.5				削り跡が顕著
15	92	D-1・2	石組遺構	石製品	地輪	幅 21.5	高さ 16.5				削り跡が顕著
15	93	D-1・2	石組遺構	石製品	地輪	幅 21.5	高さ 15.3				削り跡が顕著
15	94	D-1・2	石組遺構	石製品	地輪	幅 23.1	高さ 15.7				削り跡が顕著
15	95	D-1・2	石組遺構	石製品	地輪	幅 20.5	高さ 16.5				削り跡が顕著
15	96	D-1・2	石組遺構	石製品	地輪	幅 21.0	高さ 16.0				削り跡が顕著
15	97	D-1・2	石組遺構	石製品	地輪	幅 18.5	高さ 15.0				削り跡が顕著
15	98	D-1・2	石組遺構	石製品	地輪	幅 20.7	高さ 16.0				削り跡が顕著

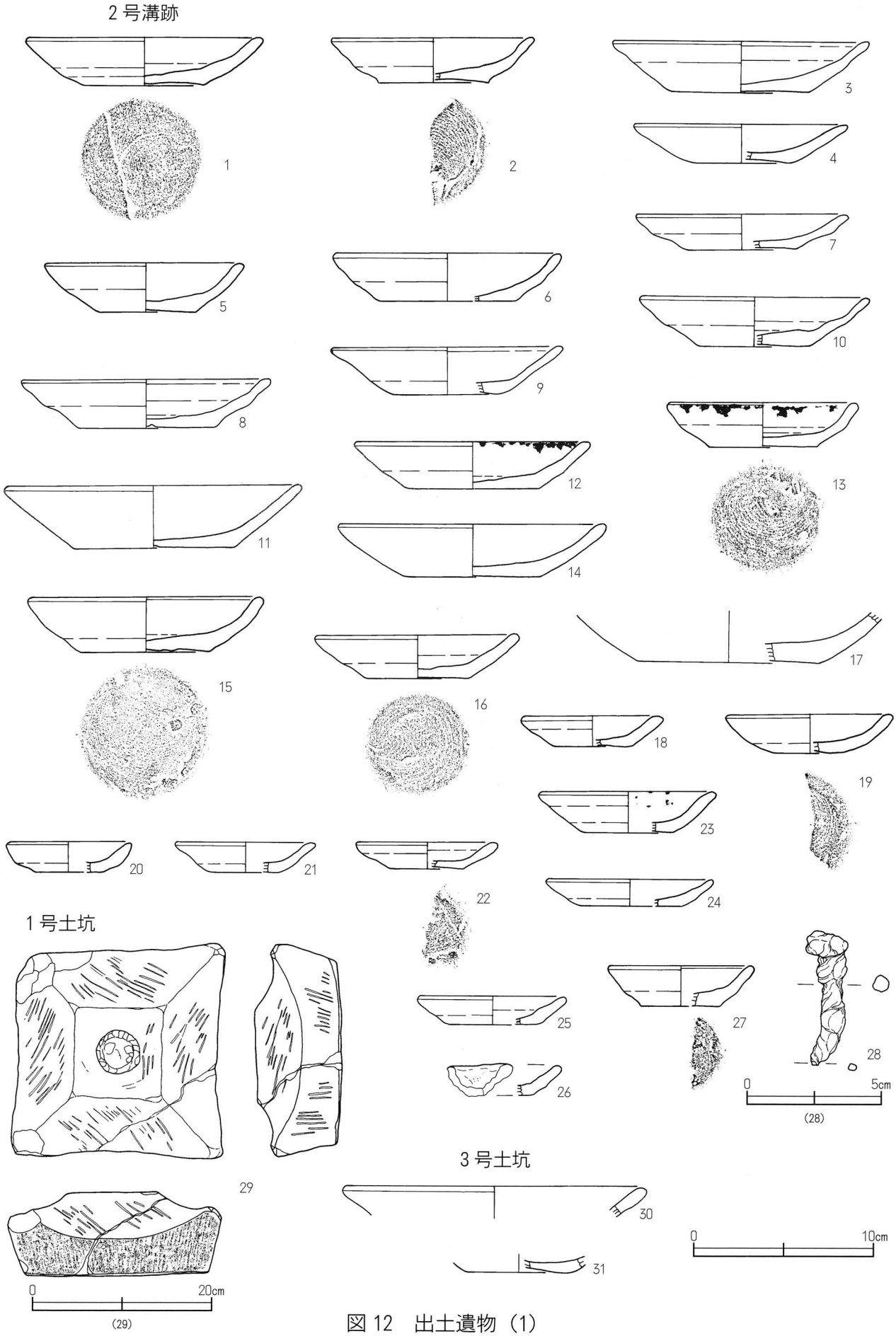

2号溝跡
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
5cm
(28)
1号土坑
29
0
20cm
(29)
3号土坑
30
31
0
10cm

図 12　出土遺物（1）

一括（1）

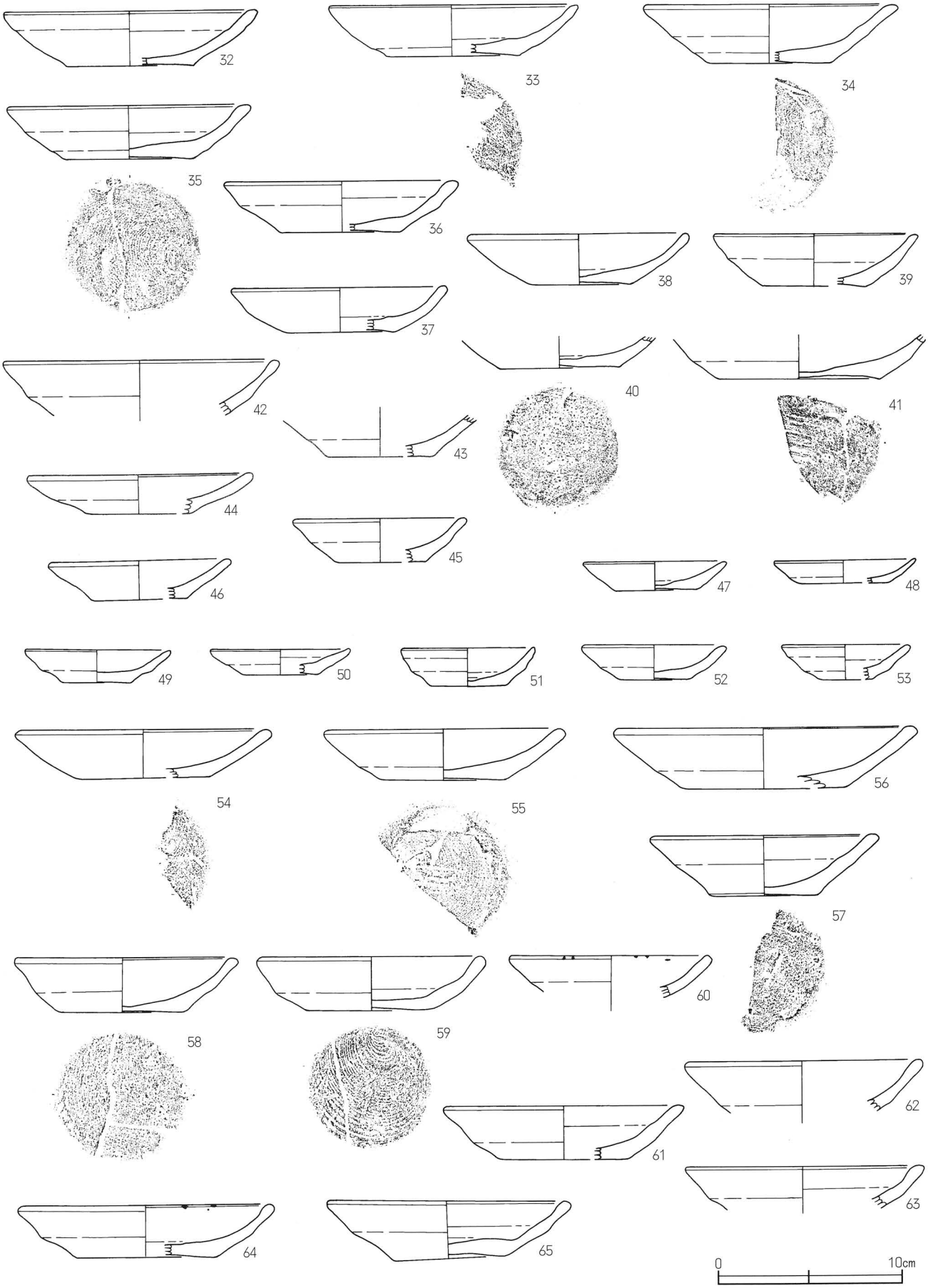


図 13　出土遺物（2）

一括（2）

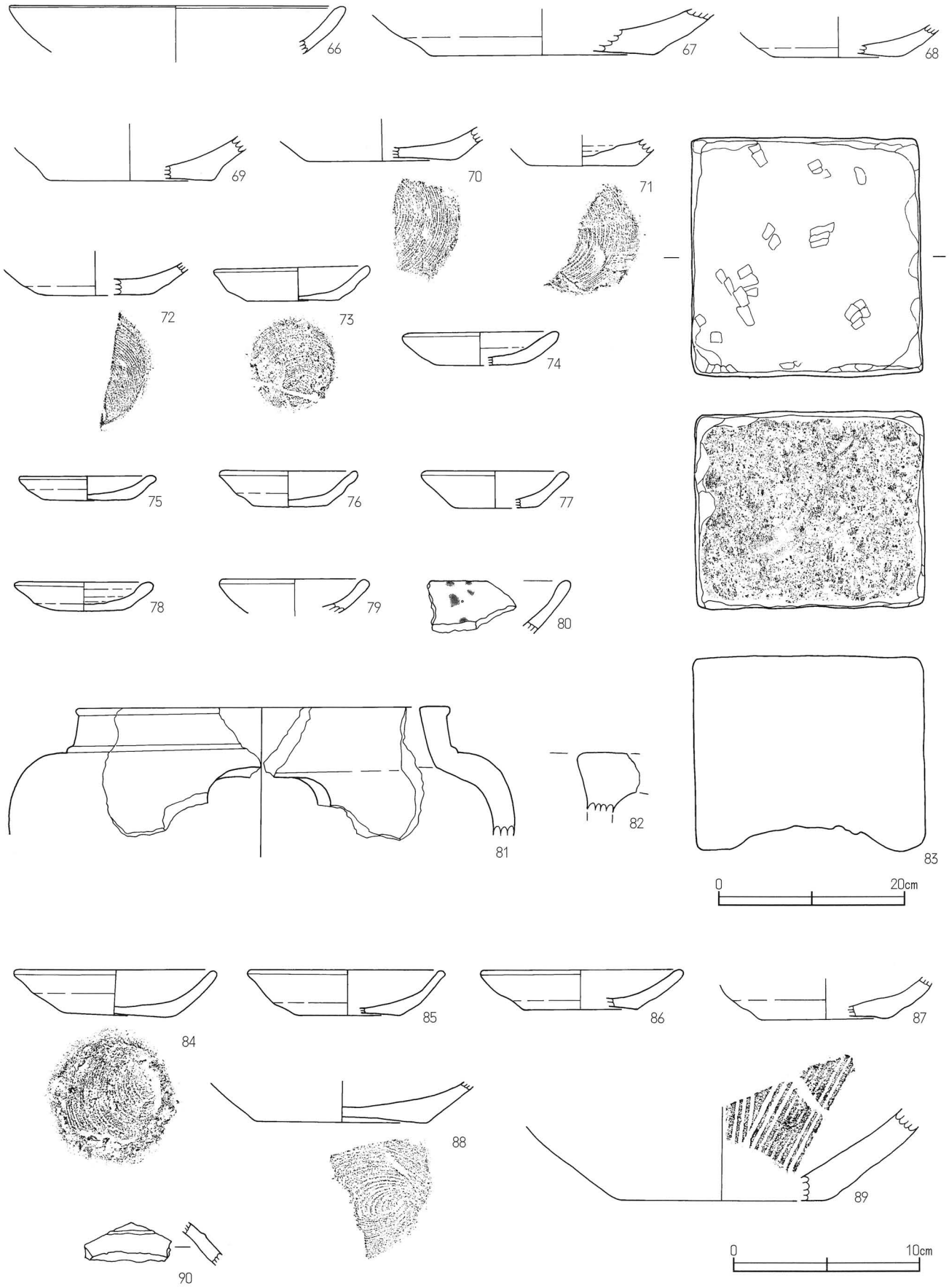


図 14　出土遺物（3）

石組遺構

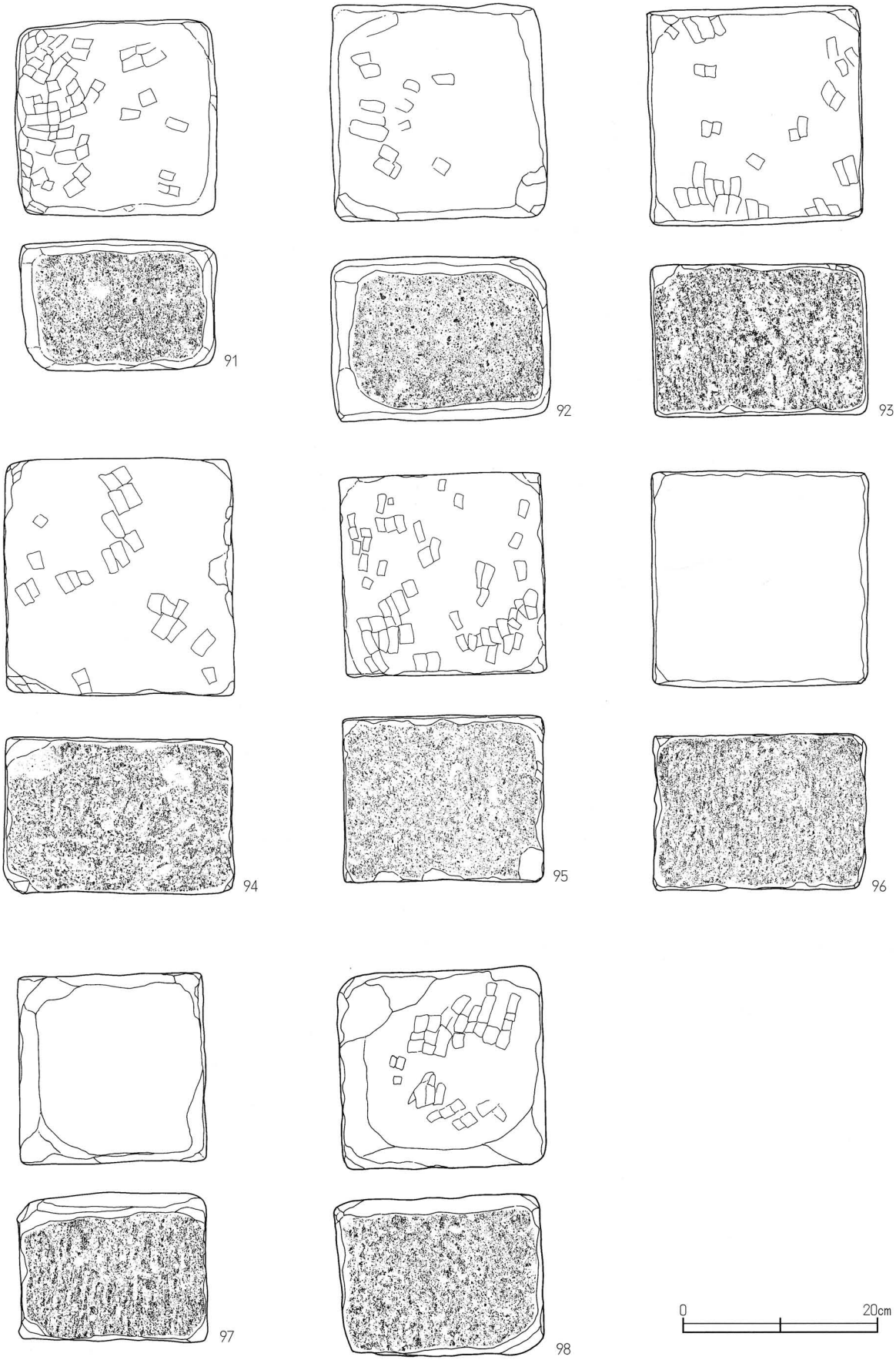
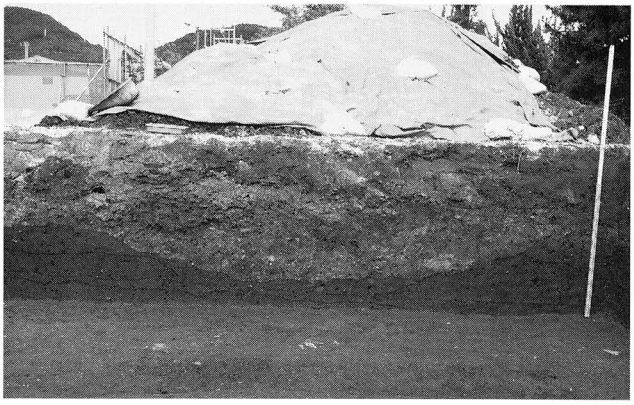
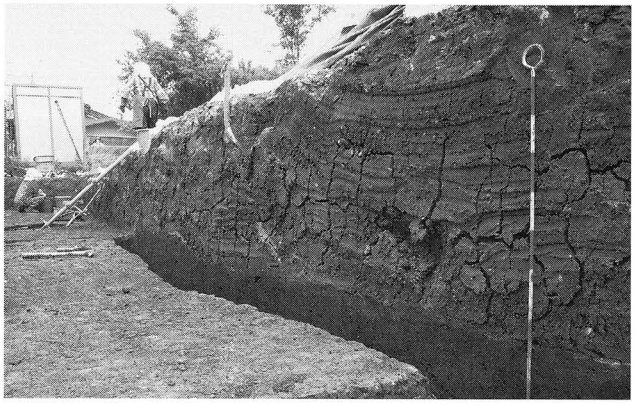


図 15　出土遺物（4）

図版1

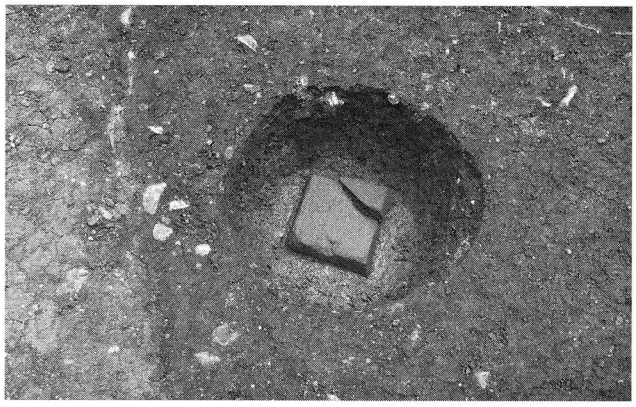


東壁層序



南壁層序

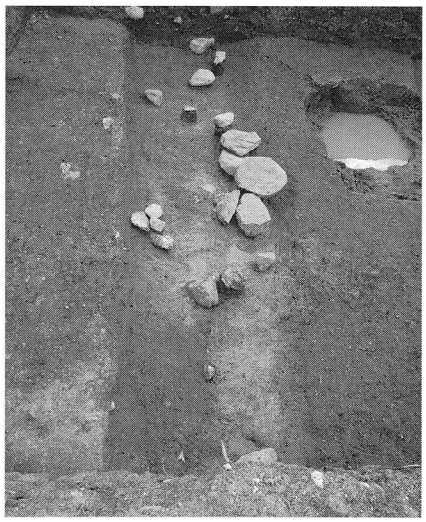
調査地近影（東から）



1号土坑

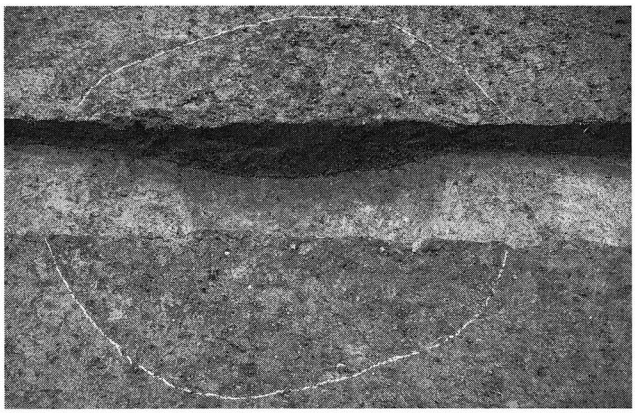
1号溝跡（1）

1号溝跡（2）



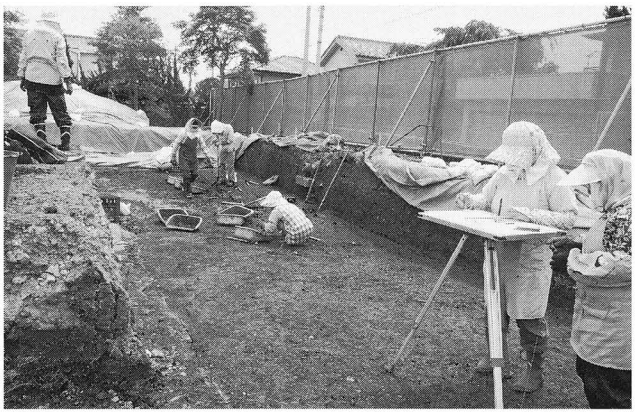
2号溝跡（1）

2号溝跡（2）



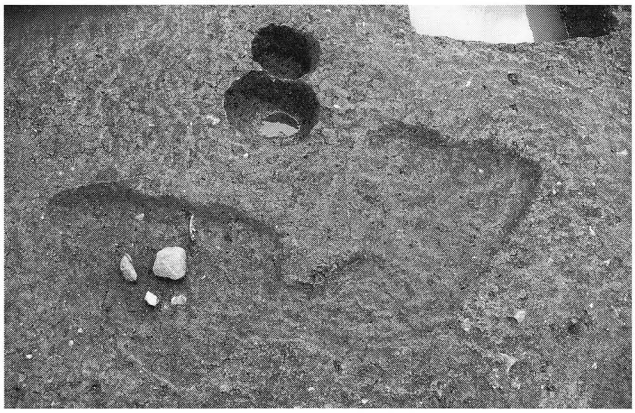
2 号土坑（1）

2 号土坑（2）

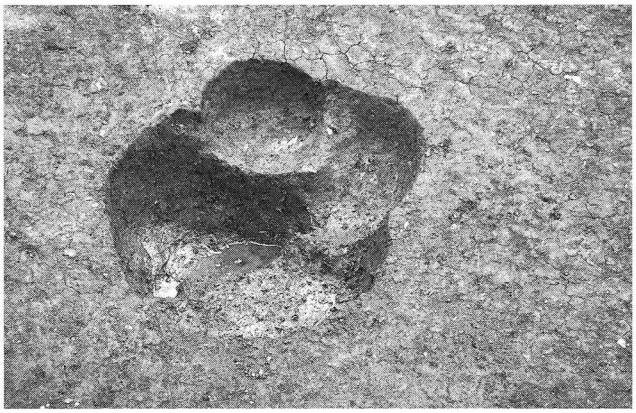


作業風景

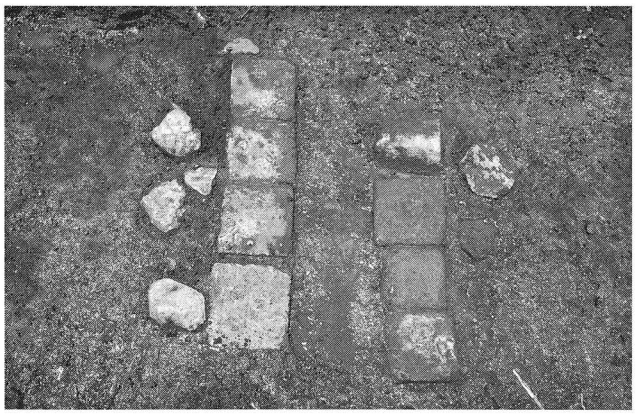
建物跡



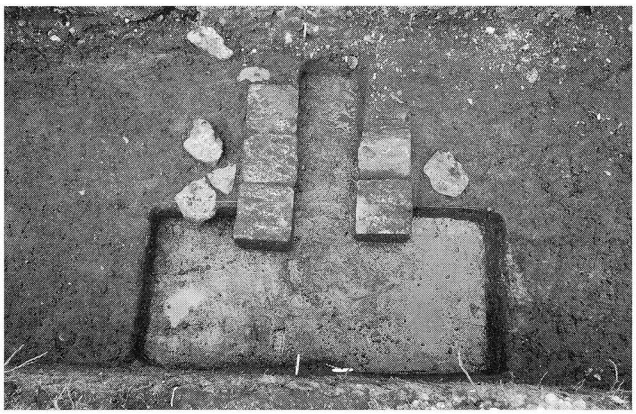
3 号・4 号土坑



2・9・10 ピット

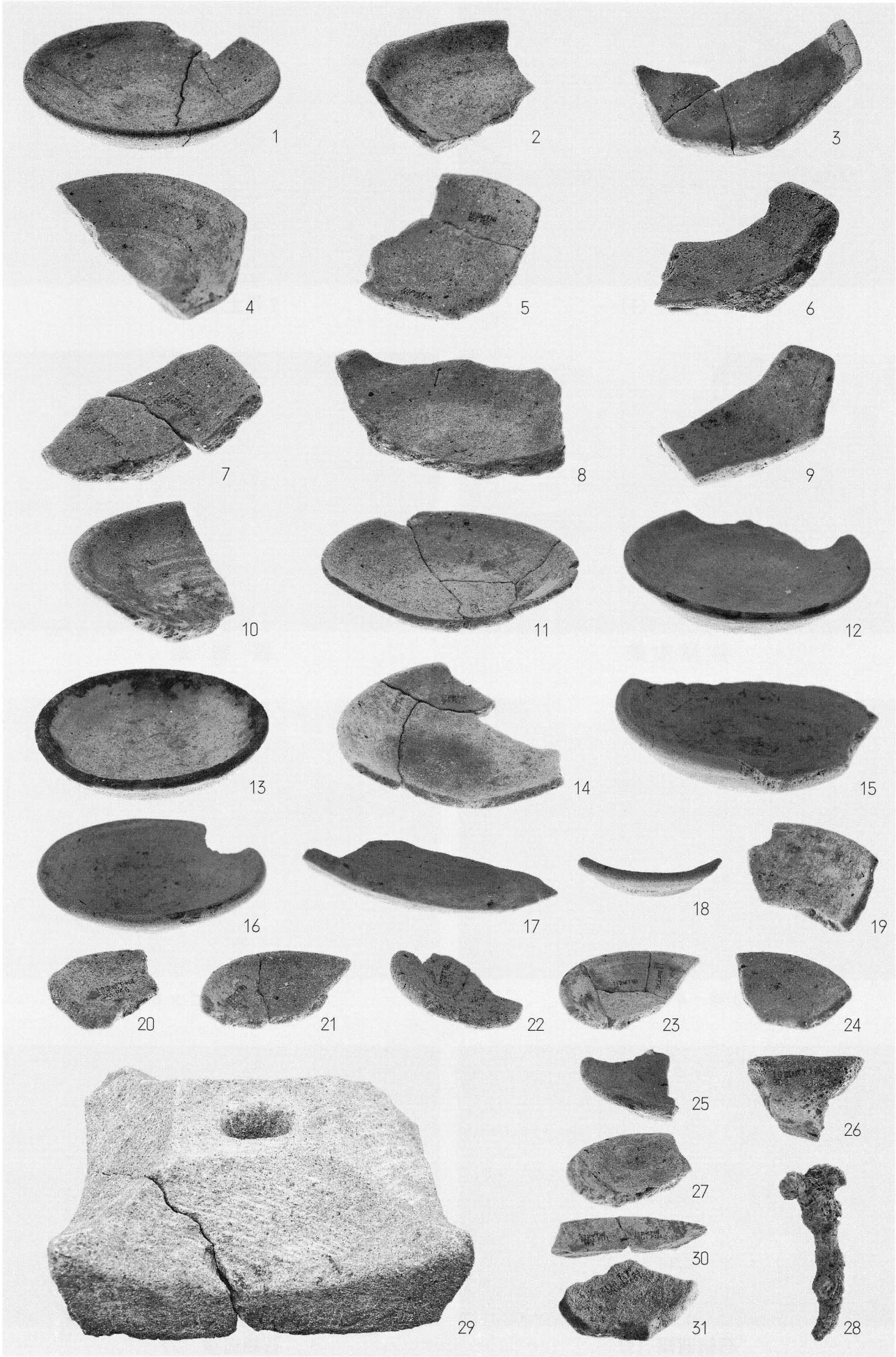


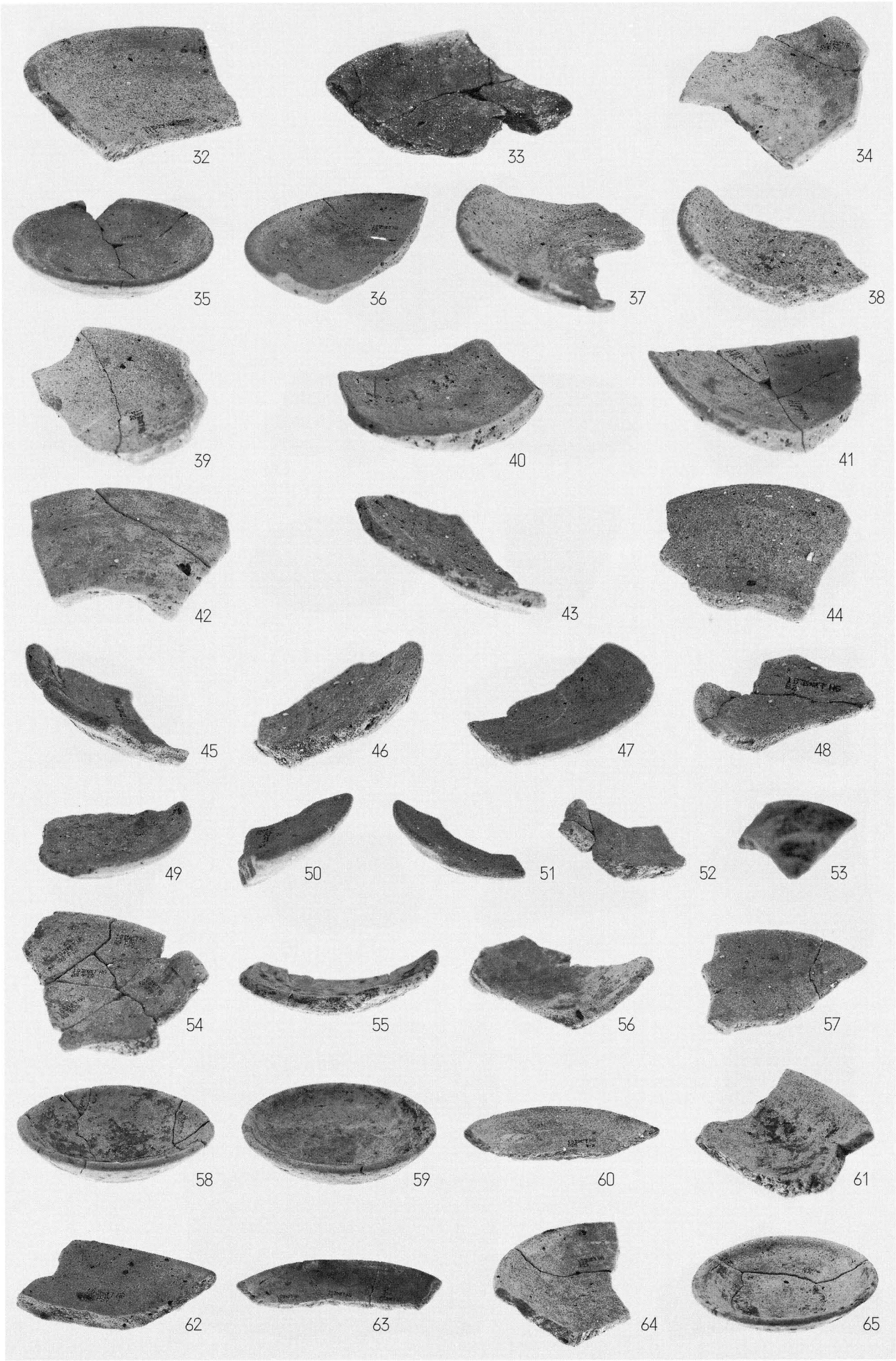
石組遺構（1）



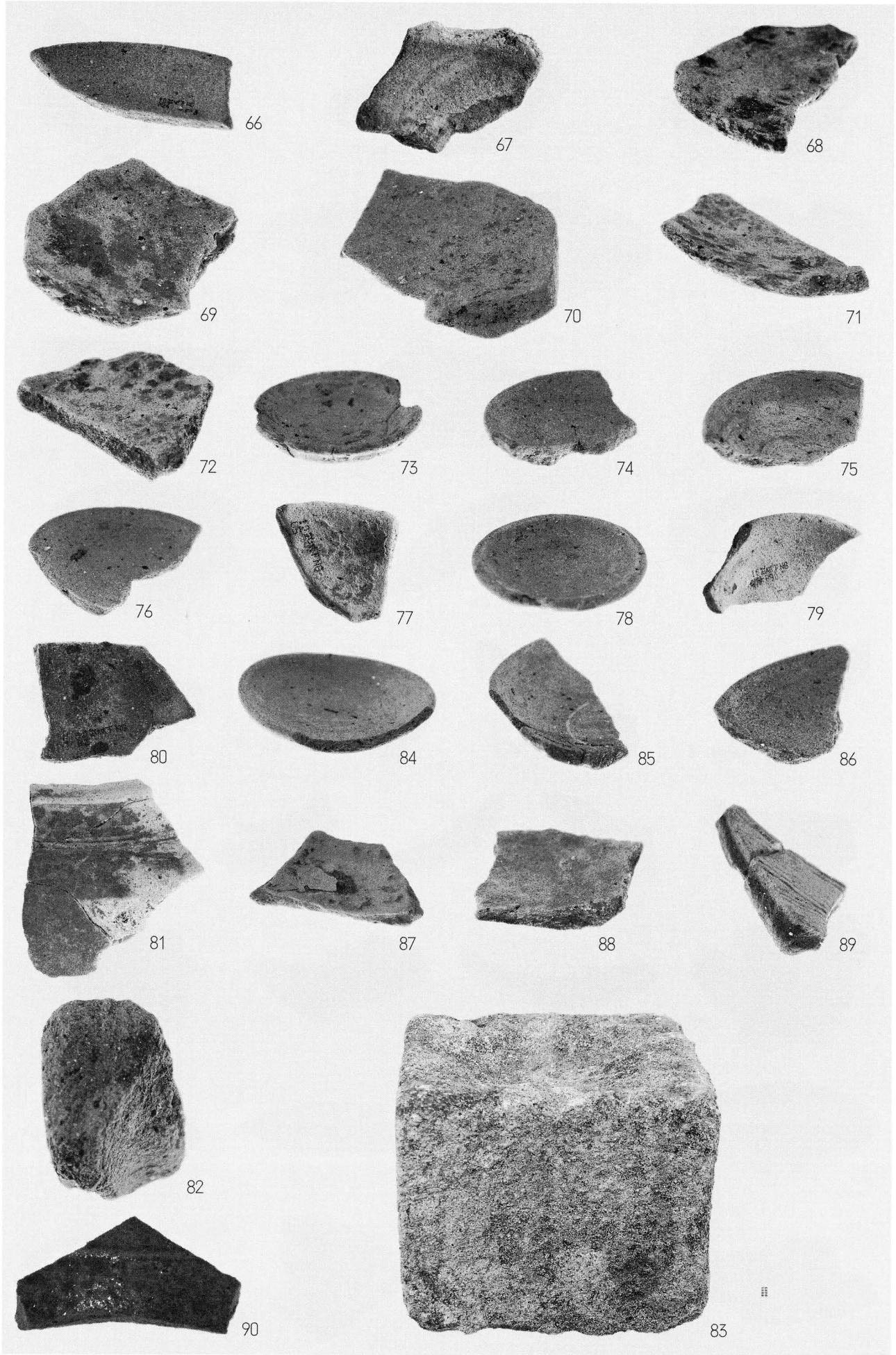
石組遺構（2）

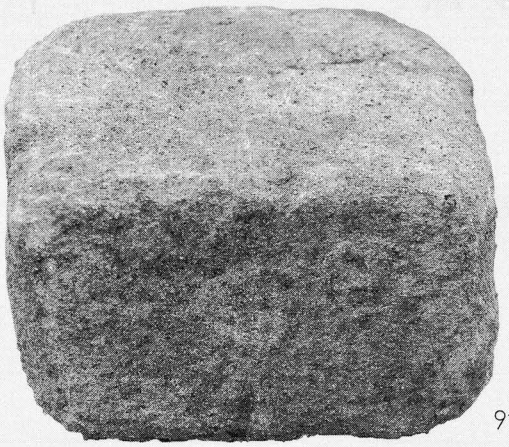
図版 3

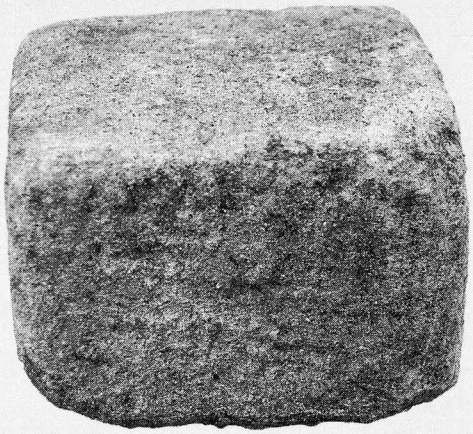

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31

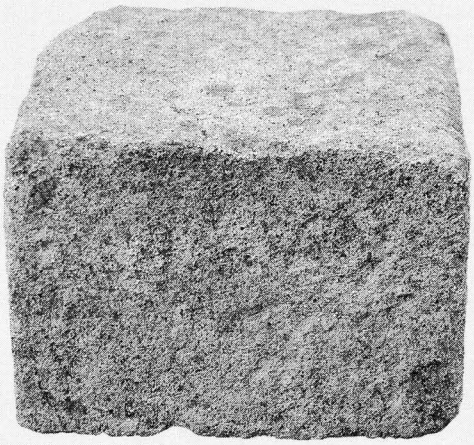

32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65

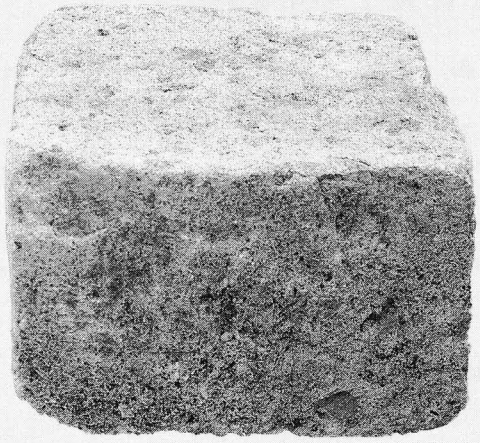
図版 5

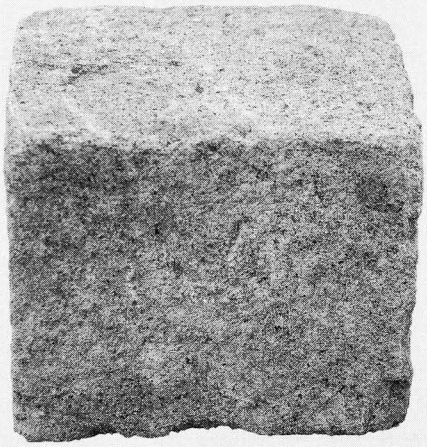

66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
84
85
86
81
87
88
89
82
90
83

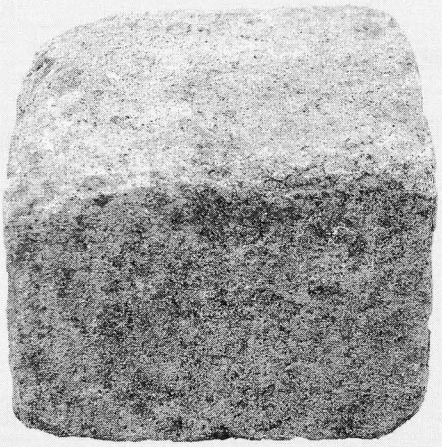

91

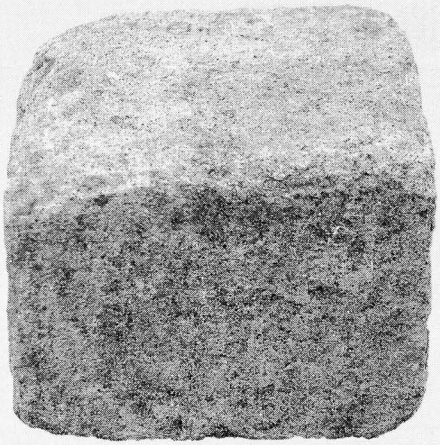

92

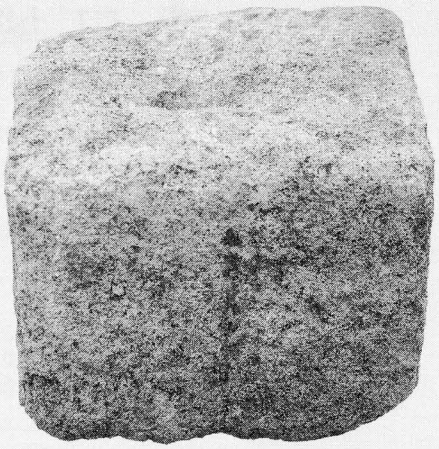

93


94


95


96


97


98

報告書抄録

ふりがな	たけだじょうかまちいせき
書名	武田城下町遺跡
副書名	日本銀行武田寮建設工事に伴う発掘調査報告書
巻次	Ⅶ
シリーズ名	甲府市文化財調査報告書
シリーズ番号	54
編集機関	甲府市教育委員会
所在地	〒400-8585　山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号　電話（055）223－7324
発行年月日	平成23年2月10日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
たけだじょうかまち 武田城下町 いせき 遺跡	やまなしけんこうふしたけだ 山梨県甲府市武田 三丁目	19201	252	35° 40′ 55″	138° 34′ 29″	2010. 5.26 ～ 2010. 7. 5 270.00 ㎡	社員寮建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
武田城下町遺跡	城下町	中世・近世	溝跡・土坑	中世近世の土器	

甲府市文化財調査報告54

武田城下町遺跡Ⅶ

－日本銀行武田寮建設工事に伴う発掘調査報告書－

平成23年2月10日

発行　日本銀行・甲府市教育委員会
〒400-8585
山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号
TEL（055）223－7324
FAX（055）226－4889

印刷　株式会社　三愛印刷
〒400-0034
山梨県甲府市宝二丁目9番7号